法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-05-09

タンザニアにおけるコーヒー市場の自由化と農地利用の変化

Kurosaki, Ryugo / 黒崎, 龍悟

(出版者 / Publisher)
法政大学人間環境学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
人間環境論集 / 人間環境論集
(巻 / Volume)
10
(号 / Number)
2
(開始ページ / Start Page)
35
(終了ページ / End Page)
46
(発行年 / Year)
2010-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00006305

Hosei University Repository

タンザニアにおけるコーヒー市場の自由化と農地利用の変化

黒　崎　龍　悟
京都大学アフリカ地域研究資料センター

1．はじめに

アフリカ農村における農業の発展や、持続可能な環境利用といった課題を考える際に不可欠なのが、いかに地域社会における農地利用が変化してきたか、あるいは変化しているかを明らかにすることである。農地利用の変化をとらえるうえでは、人口圧の高まりが農業の変容をもたらすというBoserup［1965］の議論が大きな影響力を持ってきたが、近年では、経済政策の影響、生態環境条件、文化・社会的要素などを総合的に考慮する必要性が指摘されている（たとえばNindi［2004］）。

ただ、このことをふまえてみても、とくに経済政策は農民の土地利用に強く影響する。それは、近年では、1980年代にはじまる世界銀行・IMF主導による構造調整政策（Structural Adjustment Programme）のインパクトからもうかがい知ることができる。多くのアフリカ諸国は独立後、農産物価格の引き上げや補助金などを投入することで、国内の農業生産を保護し、その成長を促してきた。しかし、1970年代、アフリカ諸国は経済危機に陥ったことで、政府の役割の縮小と、市場経済化・経済の自由化を推進する構造調整政策の導入に迫られた。同政策が、価格保護や、補助金などを撤廃する動きへと向かっていったため、政府サービスに支えられてきた農業を営む農民は生産を維持することができなくなり、代替的な生産手段を求めて試行錯誤するようになった［掛谷編 2002］。地域によっては、換金用の新規作物の集約的栽培をはじめる者もあらわれ、結果的に地域農村の営農形態が変容する事態も生じている［島田 2007］。市場の動向と分かちがたく結びついた新たな農業の取り組みは、市場価格によっては、強力な生産のインセンティブを創出し、ときに土地利用の劇的な変化を引き起こす場合もある。長い年月をかけて培われてきた在来農法は、植生の回復とのバランスの上に成立しているものであるが［伊谷 2002］、市場経済を背景にした取り組みは、そうした植生の回復のバランスについての検証なしに進むことがあり、生態環境に適したものになるとは言い切れない。したがって、農村レベルで新たな取り組みが、どのようなメカニズムで環境を改変していくのかを見定める必要がある。この論文では、人口圧や、社会文化的要因を考慮しつつ、市場経済の導入を図った経済政策の影響に焦点を当て、それらがどのように地域社会における農地利用の変化をもたらしたのかを、タンザニア南部のコーヒー産地を事例に検討する。

タンザニア政府は1961年の独立後、アフリカ型社会主義による国家建設を目指した。しかし、経済が行き詰まり、他の多くのアフリカ諸国と同様、1986年には構造調整政策を受け入れ、経済の自由化を推し進めていった。この論文があつかうムビンガ県は、独特の在来農法で食糧生産を営み、また、コーヒーからの収入に支えられてきた地域である。後述するように、コーヒー生産は政府の手厚い保護によって支えられ、そのことが間接的に食糧生産の維持にも貢献していた。しかし、構造調整政策の一環として、1993年にコーヒー市場が自由されたことをきっかけに、在来農法とコーヒー生産の補完的な関係は崩れ、生業の多様化と農地利用の変化が生じた。

以下では、ムビンガ県を事例に、まず、同県

Hosei University Repository

の農業の概要を説明し、そのなかでコーヒー生産が果たしてきた役割を紹介する。そして、コーヒー市場の自由化後、農地利用がどのように変化したのかについて述べていく。

２．マテンゴとその農業・土地保有

ムビンガ県の人口は、2002年のタンザニア統計局のセンサスでは40万人を超える［Tanzania 2004］。ムビンガ県の主要な民族であるマテンゴ（Matengo）が居住するのは、標高900m～2,000mの範囲に広がる急峻な山地である（以下、この地域全体をマテンゴ高地［Pike 1938］と呼ぶ）。年平均気温は約18度、年平均降水量は約1,000mmであり［JICA 1998］、一年は明瞭な雨季（11月～５月）と乾季（６月～10月）にわかれる。地形・植生・土壌の指標によってこの高地は西部山岳地帯、ハガティ高原、南部と北部の波状丘陵地帯という４つの地域に分類される［JICA 1998；図１］。標高1,300m以下の地域の植生は「ミオンボ（*miombo*）[1)]」と総称されるマメ科ジャケツイバラ亜科（**Caesalpiniaceae**）ブラキステギア属（**Brachystegia**）の樹木が卓越する［Itani 1998］。

マテンゴはバントゥー語系の農耕民であり、その名前は彼らの言葉で「森」を意味するキテンゴ（*kitengo*）に由来する［Ziche 1984（Schmied［1988］の引用より）］。マテンゴの起源は、近隣の諸民族がマテンゴ高地周辺に居住しはじめた19世紀中葉にさかのぼることができる。もともと現在のマテンゴと呼ばれる人びとは、氏族を単位とした集団で現在居住する高地に移住してきたが、ある氏族が他の氏族を統治するといった階層社会を形成することはなかった。しかし、19世紀中葉にズールー王国のシャカ王の支配を逃れて北上してきたンゴニや、北東に居住していたンドンデ（Ndonde）が、肥沃なマテンゴ高地を狙って侵攻してくるようになってからは、人びとは山岳地帯に身を隠し、そこで首長制に基づく社会を形成した［Ndunguru 1972；Baseheart 1972］。そして次節で述べるンゴロ農法を練り上げていったといわれる。

ドイツ植民地時代がはじまった19世紀末からはンゴニらによる侵攻も沈静化し、マテンゴは居住域を拡大していった。そして、イギリス委任統治領期の1928年にコーヒー（***Coffea arabica***）が導入された後［Ndunguru 1972］、コーヒー栽培はこの地に拡大し、現在ではほぼすべての世帯がコーヒーを栽培するようになっている。マテンゴはンゴロ農法による自給的な作物栽培と、換金作物としてのコーヒー栽培を組み合わせた

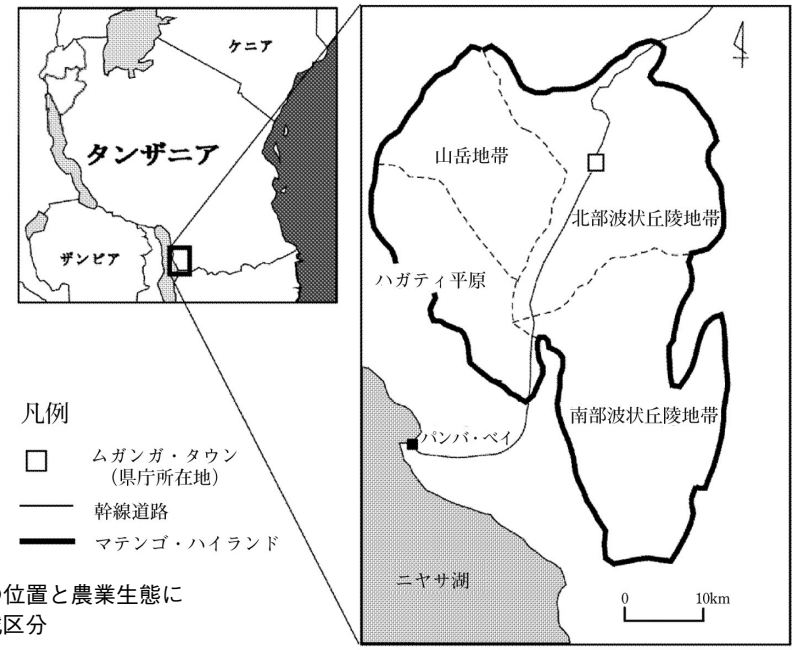

図１　ムビンガ県の位置と農業生態にもとづく地域区分

注）JICA［1998］をもとに作成

Hosei University Repository

生業様式を確立していったのである。

２．１　ンゴロ農法

ンゴロ農法は、周辺民族の侵攻を逃れるために山岳地帯に身を隠した際、限られた土地を持続的に利用するために考案されたと考えられている。ンゴロ農法は短期休閑をはさむ２年サイクルの輪作システムであり（図２）、主要な食用作物であるトウモロコシ（***Zea mays***）と主要な副食となるインゲンマメ（***Phaseolus vulgaris***）とが作付けされる。ンゴロ農法の手順は以下の通りである。雨季の終わりごろ、男性によって刈られた草は燃やされることなく、草束として格子状に並べられる。その後、女性が格子の中に立って足もとの土を堀り上げて周囲の草束にかぶせていく。格子の中央に穴が掘られるかたちになる。そのため彼らの言葉で「穴」を意味する「ンゴロ」が、農法の名称として用いられている。人びとは穴を囲む格子状の畝にインゲンマメを播種していく。乾季に入り、インゲンマメが完熟すると収穫作業がはじまる。収穫が終わった耕地をそのまま放置し、雨季のはじまりとともに再び格子の上に深さ５cm程度の播き溝を掘り、トウモロコシを播種する。12月頃に一度除草をおこない、翌年の７月ごろより収穫がはじまる。トウモロコシの収穫が終ると耕地を休閑し、その後翌年の雨季のはじめに再び草を刈り、新たなンゴロを造成する。格子状にすき込まれた草は緑肥となり［Moritsuka et al. 2000］、また掘られた穴は抗土壌侵食の機能をもつ［Itani 1998］。急峻な山岳地帯の斜面地は、雨季の豪雨により土壌侵食を受けやすい。しかしマテンゴはンゴロ農法を用いることで土壌侵食を軽減し、作物生産を営んできたのである。彼らは、２筆以上のンゴロ畑を耕作することによって、自給用トウモロコシとインゲンマメを毎年確保している。また格子状の畝にキャッサバ（***Manihot esculenta***）を植えることも多い。

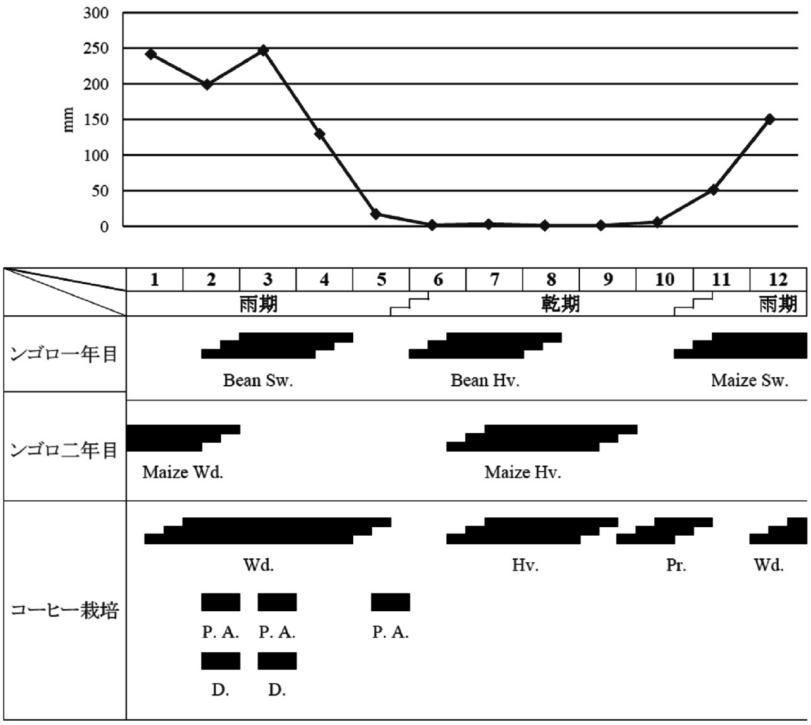

図２　月別平均降水量および農事暦

注１）Hv.（収穫）、Sw.（播種）、Wd.（除草）、Tp.（移植）、Pr.（剪定）、P.A.（農薬散布）、D.（施肥）。
注２）Mhando（2005）を一部参照。
注３）降水量については、ムビンガ県農業畜産振興局による降水量調査（1985－1999年、および2002年）をもとに月別平均を算出した。

Hosei University Repository

2．2　コーヒー栽培

コーヒーは20世紀はじめにこの地域に導入され、重要な換金作物としてマテンゴ高地全域に普及していった。前述したように現在では、マテンゴ高地を含むムビンガ県の生産量は、タンザニアの全生産量の２割を占め［加藤 2002］、国内の生産量はキリマンジャロ州をしのぎ二位である。多くの人びとは細やかな管理がいき届くように、家屋の周囲にコーヒー園をつくる。コーヒー栽培における主な作業は、乾季の施肥（堆肥、化学肥料）、農薬散布、収穫、販売、収穫後の剪定、そして雨季の除草である。経済的に余裕のある世帯は除草剤を使うこともあるが、通常は、年に４回～５回、鍬で除草する。コーヒー栽培には化学肥料・農薬といった農業投入材の施与が不可欠で、もし、適切に施与されないと、隔年結果の傾向があるコーヒーの生産は不安定になる。そのために農民は農業投入材の確保を何よりも重視する。

2．3　ンタンボ（*ntambo*）の土地保有と利用

また、ここで触れておきたいのが、マテンゴ社会に特徴的なンタンボと呼ばれる土地保有の概念である。ンタンボは二つの谷に挟まれた尾根を基本とし、ひとつのクランの統括のもと、各世帯がそのなかで土地を分割保有し、ムシ（*musi*）と呼ばれる居住域をつくりあげる［JICA 1998；加藤 2002］。マテンゴはンタンボ内の平坦な場所に家を建て、その傍らにンンドゥイ（*nndwi*）と呼ばれる小規模な菜園をつくって葉菜やカボチャなどを栽培する（図３）。その周辺はコーヒー園となっていて、バナナなどの庇陰樹が混植される。斜面地はウヘレウ（*uheleu*）と呼ばれ、ここに２筆以上のンゴロ畑をつくる。谷底のキジュングは乾季の耕作地となり、その縁にある湧水地は水汲み場として利用される。山頂付近の林キテンゴ（*kitengo*）や休閑地キゴナ（*kigona*）などは薪の採取場所になると同時に、家畜の繋牧地とされてきた。

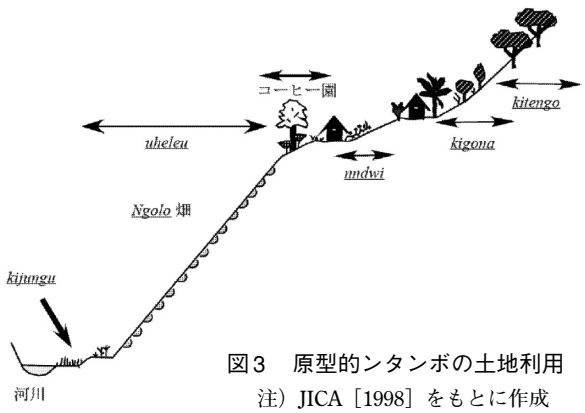

図３　原型的ンタンボの土地利用
注）JICA［1998］をもとに作成

マテンゴ社会は父系制であるため、ンタンボ内では、男子の子孫が父親より土地を相続する。土地を相続した子は、その中で自分のコーヒー園とンゴロ畑を耕作する。したがって、それぞれのンタンボには、基本的に各世帯が所有するコーヒー園とンゴロ畑のセットがいくつも存在している。マテンゴは、限定された土地利用のなかで環境を保全しながら自給的な生活を営んできたのである。しかし、ンタンボは境界があらかじめ定められていて、その領域を周辺に拡張することができない。そのため、人口が増加すれば、すべての子孫とその家族が自給するだけの農地を確保することが困難になる。ンタンボ内の土地がそれ以上細分化できなくなると、そこに居住する世帯の子孫は土地を求めて村外へ移住するようになっていった。特に、1950年代の後半から波状丘陵地帯への移住がはじまり、今日のマテンゴ高地の状況は、マテンゴ発祥の地である山岳地帯の村と、そこからの移住者たちが開拓した丘陵地帯の村という構図になっている。マテンゴ自身、旧村を山地「イトゥンビ（*itumbi*）」、新村を未開墾地「イトゥトゥ（*itutu*）」と呼んで区別し、生活環境の違いをよく話題にする［加藤 2002］。このように移住を組み入れることで、山岳地帯の人口は調整されるようになっていた。

しかし、ンゴロが土壌肥沃度を保持する農法とはいえ、山岳地帯では、長年にわたる連作によって生産性が低下し、ンゴロ畑での食糧生産に問題を抱えるようになっていた。

3．ンゴロ農業とコーヒー栽培の相補的関係

山岳地帯において生産性が低下したンゴロ農業を支えたのは、コーヒー協同組合であった。このことを理解するために、ムビンガ県におけ

Hosei University Repository

るコーヒー産業の変遷とそのなかで協同組合が果たしていた役割を説明しておきたい。

３．１　ムビンガ県のコーヒー協同組合の変遷とMBICUの役割

ムビンガ県のコーヒー栽培は、協同組合とともに歩んできた。コーヒーの導入当初、1930年代に植民地政府のもとに誕生したNgoni Matengo Cooperative Unionは、植民地政府の管理負担の軽減という点から組織されたもので、農民の福利に直接寄与するものではなかった。しかし、1950年代に、Ngoni Matengo Cooperative Unionから分離して組織されたMatengo Native Cooperative Union（MANCU）は、コーヒー栽培に関する技術的支援、買付と農業投入材の供給、クレジットの提供などの役割を果たし、ムビンガ県のコーヒー生産農民をサポートした［Mhando 2005］。1976年、集村化によっていったん協同組合制度は廃止されたものの、1983年の新「農業政策」によって協同組合制度が復活し、ルヴマ州ではルヴマ協同組合が組織された。しかし、多くの農民が運営経費の高さに不満をもつようになったために、1989年にムビンガ県のコーヒー部門はルヴマ協同組合から分離・独立し、Mbinga Cooperative Union（MBICU）が発足した［Nindi 2004］。

MBICUは、Matengo Native Cooperative Unionと同様に、買い取り価格の一部を天引きし、それを次シーズン用の農業投入材として農家に供給していた。また、MBICUはコーヒー代金の支払いを年複数回に分割していた。1回目の支払いは「アドバンス」と呼ばれ、その年予想される買い取り価格の７～８割にあたる現金が、県内の銀行からの借入金で支払われる。2回目以降は、タンザニア全国のコーヒーの集荷場となる、キリマンジャロ州モシ県のタンザニア・コーヒー流通公社でのオークションで価格が決定した後に支払われる。1回目の支払いはコーヒーの収穫期である７～９月頃で、1月頃以降が追加支払いの時期となっていた。

MBICUの運営形態は、コーヒー生産農民にとって以下のような意味をもっていた。マテンゴにとっては銀行口座を所有することがいまだ一般的ではなく、現金をもっていると他人からの借金の懇請を断れなかったり、盗難にあうなど、村での貯蓄が容易ではない。たとえ一度に多額の収入を得ても、それが一年をとおして生計を保障するとは限らない。コーヒー販売の代金の大半が支払われる1回目の支払いがあると、農家はこの時期に家を増改築したり、家財道具や生活用品を購入したりして、収入の大半を使い果たしてしまう傾向があった。そして、現金の蓄えが完全に底をつく1月頃の追加支払いによって、人々は次のコーヒーの収穫期までの生活費を補填することができた。彼らは1回目の支払いのような耐久財などを購入できるほどの多額の収入を指して「季節のカネ（*Hela ya msimu*）」と呼び、一方で、塩や石鹸といった日常生活に必須のモノを買うための収入を「急ぎのカネ（*Hela ya haraka*）」と呼ぶ。「急ぎのカネ」は年間を通じて必要であり、少量の収穫物を売るなどして必要なときにすぐ手に入る、融通が利く収入を含意している［Kurosaki 2007］。追加支払いは彼らにとって「急ぎのカネ」の役割を担い、端境期の生計維持に貢献していたのである。また、MBICUが買い取り価格の一部を天引きし、それを次シーズン用の農業投入材として農家に供給していたことは、農家がコーヒー栽培にかかる費用を確保しなくても、コーヒー樹を適切に管理、維持することに貢献していた。諸事情によってコーヒーの収穫ができなかった農家に対しては、MBICUが無利子で現金を融資し、コーヒー生産の継続を支えてきた。こうした事情から、MBICUによるコーヒー産業の運営は、マテンゴの生活にとって欠くことのできないものであった。

トウモロコシに化学肥料が必要となる時期は、雨季であり、乾季にとれた収穫物が不足する端境期である。マテンゴの生活はコーヒーからの収入によってタンザニア内の他地域よりも比較的裕福であるといえるが、上述のように、コーヒーからの収入があっても、使い切ってしまう傾向があるために、「急ぎのカネ」をまかなうにも苦慮している場面をよくみる。そのため、端境期の必要な時に化学肥料を購入してトウモロコシ畑に施与することもままならない。しかし、

Hosei University Repository

コーヒー栽培のカレンダー上、MBICUが化学肥料を供給していたのは端境期であったため、人びとはこの一部をトウモロコシ畑に転用することで、食糧生産を維持することができたのである。あるいは、MBICUの融資や追加支払いが、化学肥料の購入に一役買っていた可能性も考えられる。

しかし、コーヒー市場の自由化とそれに続くMBICUの崩壊によって、このようなコーヒーとンゴロ農業の補完的関係は崩れ、その余波で地域経済も困窮していくことになった。

3.2　コーヒー市場の自由化とMBICUの崩壊

タンザニア政府が、構造調整政策の一環として経済の段階的な自由化をはじめると、1993年にもコーヒー流通を自由化し、民間業者の買い付けを許可するようになった。民間業者はMBICUと異なり、即金の一括払いでコーヒーを買い取るシステムを採用していた。総額でみると、MBICUの支払額の方が民間業者の支払額よりもやや多いぐらいであるが、MBICUの一回目の支払いより、同時期に得られる民間業者の一括払いの方が額が大きい。乾季は成人儀礼や伝統的ダンスを競い合う祭りなどのために、できるだけ多くの現金が必要になるという事情からや、また、多くの人びとが、民間業者が一括払いということを良く理解していなかったために、民間業者を販売先として選ぶ人が急増した。折しも、南米の霜害によって世界市場でのコーヒー供給量は激減し、その影響でムビンガ県の1994年のコーヒーの生産者価格は1,000タンザニア・シリング／kgを越えるまでに跳ね上がった。そのため、一度に100万タンザニア・シリングもの大金を手にする農家も現れた[2)]。これまでにない多額の現金を手にした農家は、製粉機、中古車や単車などを購入し、また雑貨店の経営をはじめるなど、コーヒー流通の自由化を大いに歓迎した。しかし、この生産者価格の高騰が、実はタンザニアの自由化政策によるものではなく、南米産地の天候不順にともなうコーヒーの品不足が主たる原因であったことを農民は知るよしもなかった。タンザニア政府は、農産物の流通を自由化する一方で、1993年に協同組合の体制を見直し、経営不振の組合への融資を停止することを決定した。多くの負債を抱えていたMBICUもその対象となった。政府の後押しを失ったMBICUはコーヒー買い取り資金の調達に苦慮し、また即金に魅せられた多くの農民が民間業者にコーヒーを販売したため、MBICUは急速に力を失い、1996年に解体した。

1996〜98年頃、南米の不作でコーヒーの世界市場価格は一時的に高騰したものの、長期的な動向を見れば、1980年代以降、コーヒーの世界市場は下落傾向にあった［吉田 1997: 256］。そのため、南米の生産が回復すると、コーヒー価格はもとの水準にまで急落した。他方、タンザニア政府は構造調整政策のなかで、農業投入材に対する補助金を一部撤廃したために、1996年に農業投入材の価格が急騰した。自由化以前、農民はMBICUの庇護のもとで安定的にコーヒーを生産していたが、自由化によって参入してきた民間業者は、コーヒーの買い取り業にだけ専念し、生産や生計に関わるサービスを一切おこなわなかった。その結果、農民は農業投入材の購入と運搬、そのための資金の運営と管理など、それまでMBICUに任せてきた業務のすべてを自らの裁量でおこなわなくてはならなくなった。マテンゴはコーヒー樹を維持・管理するための方策に苦慮するようになっていったのである。

コーヒー価格の下落や農業投入材の価格高騰により、樹を維持するだけで赤字が出ることもあったが、コーヒー栽培を放棄しようとする世帯はほとんどみられなかった。代替的な商品作物のマーケットへのアクセスが容易ではないという事情もあるが、市場の動きで再びコーヒー価格が高騰するかもしれないという期待があったからである。そのことに加えて、マテンゴ自身が「コーヒー栽培は自分たちの体を流れる血に受け継がれている」と語るように、コーヒー栽培が一種の文化として継承されてきたこともある。また彼らにとってコーヒーは、社会的信用を得るうえで重要な役割を果たしていて、たとえば、後述のマゴマ（*magoma*）で借金をする際にもふつうコーヒー園が担保となり、その広さや樹の状態に応じて貸付額の上限が決められていた。非常時に現金を工面する方策を考え

Hosei University Repository

ると、たとえコーヒーからの収入が少なくても、マテンゴはコーヒー園を手放すことができないのである。また、彼らはコーヒーの収入、つまり「季節のカネ」によっておもに生活用品を購入するが、同時にそれを製粉機、単車、中古車などの購入や雑貨店経営に投資しようとすることをよく話題にする。製粉所や雑貨店の経営は、一年をとおして安定的な収入をもたらし、単車や車も作物を運搬したり、病人を搬送することで、時期を問わず現金収入を得ることができる。つまり、「季節のカネ」をこれらの小規模なビジネスに投資することは、周年的に安定して「急ぎのカネ」を捻出することにつながり、人びとはそのことに大きな意義を見出しているのである。

3．3　地域経済の困窮

MBICUの崩壊は、別の経済的な影響をもたらした。MBICUの解体によって融資が受けられなくなったため、コーヒーを担保に現金を前借りする金貸し業が横行するようになったことがその背景にある。貸し手は、その年のコーヒー価格を予測し、貸与額の２～３倍に相当するコーヒーの返却を求めた。このような、いわゆる高利貸しのシステムがマゴマと呼ばれ、おもに村内の製粉業者や雑貨店の経営者など、余剰の現金をもつ者がおこなっていた。借り手は、その現金を医療費や教育費に充てることもあったが、多くは農業投入材を購入し、コーヒー樹の維持、管理に振り充てていた。タンザニア産のアラビカ・コーヒーは、世界市場においてコロンビア・マイルド・アラビカ・グループに属する。そのため、毎年、コロンビア産コーヒーが世界市場に出回りはじめる12月頃には、タンザニア産アラビアカ・コーヒーの市場価格が急落する。借金をコーヒー豆で取り立てるマゴマでは、貸し手は価格が急落する前にコーヒーを回収、販売しようとして、借り手に早い返却を迫っていた。厳しい催促に対して、借り手はコーヒーの加工にかかる時間を短縮するため、本来ならば発酵によってゆっくりと取り除く果肉を、煮沸することで簡単に取り除くようになっていった[3)]。果実を煮沸することで加工にかかる時間と手間を大幅に短縮できるが、加工されたコーヒー豆は黒ずみ、干すと割れて香りも味も悪くなるなど、商品価値は著しく損なわれる。もともと、MBICUはコーヒーを三つのグレードに分けて買い取り、それよりも低い品質のものは買い取りを拒否していた。コーヒーの加工は生産者の仕事であったが、加工の良否が品質を左右するため、各農家は丁寧な加工を強いられ、その結果、ムビンガ産のコーヒーは一定の水準が保たれていたのである。しかし、品質にはこだわらない民間業者は、これらの粗悪品も、モシのコーヒー流通公社に持ち込んだため、ムビンガ産コーヒーは「粗悪」のレッテルを貼られ、全体の価格低下を招くことになってしまった。このため、コーヒー栽培農民の生活はますます困窮することになった[4)]。

コーヒー価格の低下には流通制度も関わっていた。コーヒー市場が自由化された当初、民間業者は農村での買い付けと加工、輸出の業務それぞれにライセンスの取得が義務付けられていた［辻村 2006］。外資系の民間業者はこれらのライセンスをすべて取得し、農村での買い付けとオークションでの価格決定という二役を同時に担い、農村で買い取ったコーヒーをオークションで販売し、それらを自分たちで落札していた。民間業者は、利益を上げるためにオークションでの入札価格をできるだけ低く設定したため、生産者からの買い取り価格も低く抑えていた。ムビンガのコーヒー取引には多くの外資系業者が参入していたが、なぜか業者間の価格競争は起こらず、生産者価格は年々引き下げられていったため、一部では業者間の談合も噂されていたのである［黒崎 2007］。

MBICUの崩壊や肥料価格の上昇、コーヒー価格の急落は、コーヒー生産の維持のみならず、間接的に化学肥料に依存するようになっていたンゴロ農法にも影響し、主食作物の生産性は著しく低下した。

4．農地利用の変化

こうした流れのなかで、いよいよコーヒー市場の自由化の影響は、食糧生産手段の多様化や農地利用の変化として顕在化した。Nindi［2004］

Hosei University Repository

とMhando & Itani［2007］によると、この状況への対応策には次のものが挙げられている。すなわち、丘陵地帯への食用作物畑の拡大、キャッサバ栽培の拡大、ブタ飼養の普及、谷地耕作の拡大である。このなかでもとりわけ農地利用に変化をもたらしたのが、丘陵地帯への食用作物畑の拡大と谷地耕作の拡大である。以下ではこの二つについてそれぞれ具体的に説明していく。

４．１　丘陵地帯への食用作物畑の拡大

前述したように、マテンゴは山岳地帯から丘陵地帯へとその居住域を拡大してきたわけだが、その移住のなかでもンタンボの土地利用は踏襲されていた。つまり、山岳地帯で土地を相続できなかった者は、丘陵地帯にいき、やはり一尾根を居住地とする。そしてそのなかで、キテンゴ、ウヘレウ（ンゴロ）、コーヒー園、キジュングなどといった土地利用を展開するのである［加藤 2002］。こうした移住には、ンタンボの社会地理的、環境保全的側面が保持されていたのである。

ところが、こうしたンタンボの土地利用に変化がみられるようになった。移住をせずに山岳地帯に留まり、土地を相続する世帯の多くが、経済自由化の影響から、化学肥料なしにトウモロコシの必要量を確保できないと悟り、そのすべてをコーヒー園に転換するようになったのである。コーヒーの価格の低下による収入の減少を、生産量の増大で補完しようとする試みである。また、ある人びとはトウモロコシ用の耕地の一部をキャッサバ耕作に充てるようになった。キャッサバは救荒作物といわれ、比較的痩せた土地でも生育する。キャッサバはもともとマテンゴの主食ではなく、「腹もちが悪い」などの欠点が指摘されるが、人びとは、地力の落ちたンゴロ畑で、トウモロコシやインゲンマメを栽培する代わりに、生産が確保できるキャッサバを主食のひとつとして耕作するようになったのである。

このようにコーヒー園やキャッサバ畑を拡大する人びとは、その代わりに、丘陵地帯に広大なトウモロコシやインゲンマメを栽培するための畑を開いて通いながら耕作するようになった［Nindi 2004］。つまり、経済の自由化を機に、雨季に丘陵地帯へ耕作だけのために出かけるという「季節耕作」をおこなう世帯が増加したのである。丘陵地帯の未開墾地は、山岳地帯に比べて土壌の肥沃度が保たれている地域であり、そのため、農業投入材を用いなくても、山岳地帯で耕作する以上の収量が保証されているからである。

また、若者世代もこのような「季節耕作」に参入するようになった。若者世代の多くは、生まれた時から、先祖が作り上げたンゴロとコーヒーの土地利用セットを踏襲しているだけなので、未開墾地を開墾するだけの技術をもっておらず、丘陵地帯での耕作を見合わせてきた。しかし、土地を相続するために山岳地帯に留まる若者は、とくに人口が増加するなかで、相続できる土地の細分化が進行し、わずかな耕地では、一部をコーヒー園とし、残りを食用作物用の畑としても、トウモロコシの必要量を確保できないと知り、そのすべてをコーヒー園に転換し、「季節耕作」に励むようになったのである。山岳地帯の一部地域では、居住者のコーヒー園の８割がそれを管理する人びとが住むンタンボ内にあるのとは対照的に、食用作物の畑は４割以上が村外に存在している［Nindi 2004］。

ただし、季節的な耕作というかたちでの耕地の外延的拡大には問題も指摘されている。こうした村外の耕地は、そこに行くまでに１～２日要する距離にある。本来、拡大家族によって所有されてきたンタンボという領域は、居住空間であると同時に生産空間でもあった。人びとが、林や畑に囲まれながら暮らすことで、土地の細やかな管理と保全が可能であったが、遠隔地の畑には薪を提供する林は必要ないので、すべて切られることもある。しかも、丘陵地帯は、山岳地帯ほど急峻ではなく、ンゴロ農法ではなく、横畝を立てるだけの農業をおこなう人びとも少なくない。豪雨によって崩れた畝をこまめに修復する人もいない。そのため無人の耕地の拡大が土地荒廃を引き起こす可能性も指摘されている［Nindi 2004］。

Hosei University Repository

４．２　谷地における乾季作

上記の例は、いわば土地の外延的な拡大による対処といえるが、もうひとつここであげる谷地における乾季作は、従来それほど利用されてこなかった土地を再評価して集約的に利用しはじめた例である。

マテンゴは、ンゴロ農法のような雨季作とは別に、乾季に作物栽培もおこなう。乾季作は、川の水位が下がる６月～７月ごろに谷地・キジュングではじまる。人びとは、キジュングにめぐらされた排水溝の整備や泥さらいをしながら畑となる土地の草を刈る。刈り草が乾いた頃を見計らって火を入れ、その後、表層土壌を乾燥させるために荒起こしをおこなう。続いて土塊を砕き、整地して土の表面を平らにすると、畝をたてずに播き溝を設け、おもにインゲンマメとトウモロコシを混植する。除草はインゲンマメの蔓が伸びる前に、一度だけおこなう（図４）。キジュングではインゲンマメ、トウモロコシの他、ハクサイ（***Brassica* sp.**）、カボチャ（***Cucurbita* sp.**）、トマト（***Lycopersicon esculentum***）、タロイモ（***Colocasia esculenta***）などが栽培される。カボチャやインゲンマメの若い葉は副菜となり、アブラナ科作物と併せて、生鮮野菜が不足する乾季の副菜を補うものとして重宝されている。基本的に無施肥であるが、堆肥や硫酸アンモニウムなどの化学肥料が利用されることもある。

これらの収穫物は自家消費され、余剰は販売される。キジュングで栽培されるトウモロコシやインゲンマメの収穫時期は端境期に当たり、市場での収穫物の販売価格は高くなる。したが

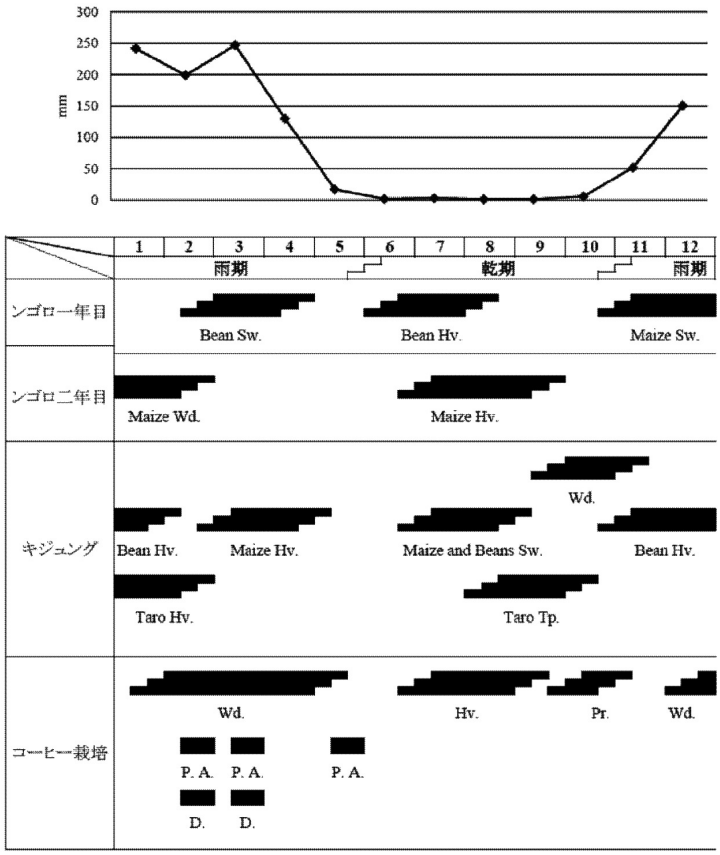

図４　谷地（キジュング）耕作を含めた農事暦

注１）Hv.（収穫）、Sw.（播種）、Wd.（除草）、Tp.（移植）、Pr.（剪定）、P.A.（農薬散布）、D.（施肥）。
注２）Mhando（2005）を一部参照。
注３）降水量については、ムビンガ県農業畜産振興局による降水量調査（1985－1999年、および2002年）をもとに月別平均を算出した。

Hosei University Repository

って、キジュングで栽培される作物は貴重な現金収入源にもなる。

しかし、こうした潜在力のある谷地は、コーヒー市場の自由化以前は、かなり粗放的にしか利用されてこなかった。その理由として、キジュングの耕作が重労働なことがあげられる。実際、キジュングの土壌は粘質性で、鍬にくっつきやすく、そのために鍬をふるう腕がすぐに重くなる。また雨季の到来が早い年には、トウモロコシの登熟期に水位が上昇して根腐れをおこすことがしばしばある。そのためにも、水位を下げるために排水溝を整備しなければならず、これもまた重労働となる。しかも、キジュングの耕作期はマテンゴ高地の一年で最も寒い５～６月にあたるので、水辺での労働を人びとが忌避していることも考えられる。ネキリムシに似たキリンガ（*kilinga*；未同定）と呼ばれる昆虫による根部の食害が深刻なことも谷地耕作の問題としてよく言及される。

ところがこうした制限要因にもかかわらず、とくに自由化以降、コーヒーからの収入の低下・経済の困窮を補うように谷地における自給・換金用の作物栽培が活発化した。近年の谷地利用に特徴的な動きには、１）新種のタロイモの栽培と、２）換金用のトマト栽培、そして３）未熟トウモロコシの販売がある［Kurosaki 2007］。

この地域でのタロイモ栽培は、もともとコーヒー園に混植するというように、アップランド用の栽培品種であった。しかし1980年代中ごろに、湿潤な環境に適した新しい品種が他村からもたらされ、1990年代に栽培世帯数が急増した。普及した要因として、生育がよく、種茎の採取が容易で、２～３年で十分な量になることと、葉や葉柄がこれもまた当時普及しつつあった豚の餌に適していたことがあげられる。タロイモは農薬や化学肥料を必要としない。収穫期が端境期である１～２月にあたるので、町から買い付けにくる人びとに販売すればささやかではあるが端境期の現金収入にもなる。こうした要因もタロイモの普及を支えたといえる。

換金用のトマト栽培については、丘陵地帯の村ではすでに1960年代にみられたが、当時トマトは雨季作が基本であった。雨季に栽培すると、ウィルスによる病気が避けられない。病気を防ぐための農薬の購入が負担となり、それが、人びとのトマト栽培への参入を阻んでいた。しかし、乾季にキジュングで先駆的にトマト栽培を試みる人があらわれ、農薬が必要とならないことが知られるようになると、とくに若者のような初期資本をもたない人びとが乾季のトマト栽培をはじめるようになった。また、近年、矮性で支柱を必要とせず、傷みにくく、生産性の高い品種が導入されたことがトマト栽培の普及に拍車をかけた。ムビンガ・タウンの市場の商人は、トマト栽培で有名な隣州のイリンガ（Iringa）州マカンバコ（Makambako）までトマトを買い付けにいっていたのだが、とくに2003年頃よりマテンゴ高地の村々からの市場への持ち込みが多く、マカンバコへと買い付けに行かなくなったという。

またキジュングで栽培したトウモロコシの未熟穂を販売する世帯も増えてきている。未熟トウモロコシは、焼くか、茹でて食べられる。谷地で栽培されるトウモロコシが収穫するのに十分な大きさになる頃、ムビンガの市街地では道沿いのところどころで焼き・茹でトウモロコシが売られる。商人が未熟トウモロコシを村にまで買い付けに来るようになったのは2001年頃からだといわれる。50本販売する世帯から1,000本販売する世帯まで、その販売規模は一様ではないが、この未熟トウモロコシを積極的に販売し、端境期の収入源とする世帯が増えている。

このように、雨季にはタロや未熟トウモロコシ、乾季にはトマトというように、キジュングの収穫物は、周年的に「急ぎのカネ」を供給する役割も果たすのである。キジュングの耕作は、雨季作のトウモロコシが不作であった年には、とくに活発になる傾向がある。

５．おわりに

マテンゴのンゴロという環境保全型の在来農業と、コーヒー生産を内包するンタンボの土地利用に支えられた生活は、経済体制の移行で急激な変化の波に飲まれていった。協同組合に支えられたコーヒー生産と食糧生産は補完的な関係にあったが、コーヒー市場の自由化の影響で

Hosei University Repository

協同組合が倒産し、そのような関係が崩れ、人びとはコーヒー生産や食糧生産の維持、代替的な現金収入の獲得に奔走するようになった。そのなかで従来の農地利用のかたちは変化し、丘陵地帯の急激な開墾のように環境への悪影響の兆しがみられた一方、谷地利用の活発化のように、既存の土地利用がより集約的な方向へと展開する場面も確認できた。

1990年代になり、国際的な開発戦略の主題が構造調整から貧困削減戦略となって以来、「モノ中心から人間中心」ということが強調されている。貧困削減戦略では、社会開発を重視し、農村の生活を多面的にサポートしようとする動きがみられる。また、人びとの主体的な取り組みを支援することを目指し、住民参加という考えはもはやあらゆる開発の前提となっている。このような開発の試みを有効にするためには、これまで、そして現在、農民自身がどのように外部環境の変化に対応し、そのなかでどのような主体的な対応を展開してきたかについての詳細を知ることから重要な手掛かりが得られるはずである。この論文であつかった事例のように、経済体制の移行のなかで住民は生計を維持すべく、農地利用に関しても主体的な対応を繰り広げてきた。ただ、その内容は、環境の荒廃につながる側面がある一方で、利用の集約化を促しているというように、一義的にとらえられるものではない。農業の発展や持続可能な環境利用に取り組む援助ドナーなどは、こうした点に留意しながら、現在の地域社会の状況を詳細に把握することに努めて、そのなかでネガティブな影響がみられるようであれば、それを緩和して、ポジティブな動きがあれば、それをより引き出すような支援を目指すことが重要であろう。

註

1）乾燥疎開林を意味するスワヒリ語。スワヒリ語はタンザニアの公用語の一。この論文では、初出に限り、スワヒリ語は斜体、マテンゴ語は斜体に下線、学名は太字のアルファベットを付記する。

2）参考として2001年の時点における地方公務員の平均月収は、5万タンザニア・シリング前後であった。

3）コーヒーを販売するまでの精製過程は以下に示すとおりである。まず赤く成熟したコーヒーの果実から、手動の機械で外皮を取り除く。それを袋に詰めて屋内に数日から1週間放置し、種子に付着した果肉を発酵させて、果肉を完全に取り除く。その後、豆を洗い、約1週間陰干しし、乾燥させる。果実を煮沸することによって、この発酵にかかる時間と手間を省略することができる。

4）このことを重く見たムビンガ県政府はマゴマを禁止したが、銀行から融資を得るのが容易でない住民にとって、マゴマは必要悪であり、今でも秘密裡におこなわれている。

参考文献

Basehart, H.W. 1972. Traditional History and Political Change among the Matengo of Tanzania, *Africa* 42 : 87–97.

Boserup, E. 1965. *The conditions of agricultural growth: the economics of agrarian change under population pressure*. London, Earthscan.

ICRA（International Center for Development Oriented Research in Agriculture）. 1991. *Farming Systems Study of the Matengo Highlands, Mbinga District, Tanzania*. Wageningen, ICRA.

Itani, J. 1998. Evaluation of an Indigenous Farming System in the Matengo Highlands, Tanzania, and Its Sustainability, *African Study Monographs*, 19（2）: 55–68.

伊谷樹一．2002.「アフリカ・ミオンボ林帯とその周辺地域の在来農法」『アジア・アフリカ地域研究』2 : 88–104.

JICA （Japan International Cooperation Agency）. 1998. *Integrated Agro-ecological Research of the Miombo Woodlands in Tanzania*, JICA, Tokyo.

掛谷誠編．2002.『アフリカ農耕民の世界』京都大学学術出版会.

加藤正彦．2002.「タンザニア・マテンゴの掘り穴耕作とコーヒー栽培―土造りと木造りによる集約的農業」掛谷誠編『アフリカ農耕民の世界―その在来性と変容』京都大学学術出版会，91–124.

黒崎龍悟．2007.「経済自由化後の10年とコーヒー栽培農民―タンザニア・マテンゴ高地におけるコーヒー生産と販売の現在」『アフリカレポート』45，15–19.

Kurosaki, R. 2007. Multiple uses of small-scale valley bottom land: case of the Matengo, southern Tanzania. *African Study Monographs Supplementary Issue*, 36 : 19–38.

Hosei University Repository

Mhando, D. 2005. *Farmers' Coping Strategies with the changes of Coffee Marketing System after Economic Liberalisation: The Case of Mbinga District, Tanzania.* (Ph.D. dissertation), ASAFAS, Kyoto University.

Mhando, D. & J. Itani. 2007. Farmers' Coping Strategies to a Changed Cofee Market after Economic Liberalization: The Case of Mbinga District in Tanzania. *African Study Monographs Supplementary Issue*, 36 : 39−58.

Moritsuka, M. *et al*. 2000. Significance of Plant Residue Management under the Matengo Pit System in Mbinga District, Southern Tanzania. *Japanese Journal of Tropical Agriculture*, 44 (2): 130−137.

Ndunguru, E. 1972. Historia, *Mila na Disturi za Wamatengo*. East African Institute Bureau, Nairobi.

Nindi, S.J. 2004. *Dynamics Land Use Systems and Environmental Management in Matengo Highlands, Tanzania.* (Ph. D. dissertation), ASAFAS, Kyoto University.

Pike, A.H. 1938. *Soil conservation amongst Matengo tribe*. Tanganyika Notes and Records, 6 : 79−81

Schmied, D. 1988. *Subsistence Cultivation, Market Production and Agricultural Development in Ruvuma Region, Southern Tanznia.* (Ph.D. dissertation), Erlangen University, Nurnberg.

島田周平．2007.『アフリカ可能性を生きる農民　環境―国家―村の比較生態研究』京都大学学術出版会．

Tanzania NBS（National Bureau of Statistics）2004. *2002 Population and Housing Census Volume IV District Profile Mbinga*. NBS, Dar es Salaam.

辻村英之．2006.「コーヒーの価格形成と協同組合・小農民―『キリマンジャロ』の生産から輸出まで」『クオータリー［あっと］』3 号，8−23.